

■ 綱島 梁川 (つなしま りょうせん)

明治6年5月27日～明治40年9月14日 (1873～1907)

名は栄一郎。綱島長四郎・クメの嫡男として、有漢村市場（現・高梁市有漢町）に生まれる。明治11年（1878）有漢村知新校に入学し、中村長遷・脇田厚の指導を受け、同19年（1886）知新校を卒業し、同校の助教となり教鞭を執る。

同郷の医師・神崎秀甫の影響を受け同23年（1890）高梁教会で基督教の洗礼を受ける。学問を好み牧師の指導により英語を学ぶ。同25年（1892）1月、志を立てて東京専門学校（現・早稲田大学）に仮入学、入学早々坪内逍遙の講義に感動し、生涯師と仰ぐ。同28年（1895）文科を卒業、坪内逍遙・大西祝の影響を受ける。卒業後、「早稲田文学」の編集に従事する。

その後数年文芸・美術・教育・宗教・倫理などの理論の諸問題を「早稲田文学」、「日本教育」等に発表。早稲田一門の秀才の名が高くなった。同29年（1896）春 突然咯血し同33年（1900）以降約8年間、終生殆病床を離れることができなかった。

しかし、闘病の中で益々深い研究と文筆活動を続け、多くの論文を発表した。中でも、同37年（1904）の3回にわたる見神の実験と言われる宗教上の体験を述べた梁川文集や病間録が出版され、全国的に大きな反響を呼び注目された。その後、人生や社会に悩む若い青年、全国各地の様々な階層の人たちが梁川を訪ねたり、手紙で教えを請う者が後を絶たなかった。その中には、二十歳の頃の石川啄木や倉敷出身の薄田泣菫、文豪徳富蘆花、宗教家西田天香、戦後文部大臣をした安倍能成などがいた。啄木は梁川の死を弔う文の中で「故人に対し師と呼ぶ、兄と呼ぶ、親しき友と呼ぶ。我があらゆる友の中で最も大いなる一人と呼ぶ。」と述べて親愛と尊敬の気持ちを表した。梁川は明治後期の高山樗牛、西田幾多郎と並ぶ三大思想家の一人であり、西洋倫理学研究の先駆者であった。また、白陰、法然、親鸞など仏教の理解者であり、日本的キリスト教徒であったといわれている。著作物は没後も春秋倫理思想史、寸光録、我観録など出版され、大正12年（1923）には梁川全集10巻を発刊した。

最後まで東京での生活であったが、郷土への思いも強く、友人や後輩たちとの絆も深く、有漢町の教育・人材育成や先進的な村づくりに与えた影響は大きいものがあった。